

英語の過去時制の維持に関する問題点

著者	小林 悦雄
雑誌名	東北大学言語学論集
号	1
ページ	25-33
発行年	1992-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00128001

英語の過去時制の維持に関する問題点

小、木 悦、雄

キーワード：過去文脈における自由節 時制の一致 話者の視点 言語観の揺れ

はじめに

「去年日本にきたメキシコの友人が東京の満員電車に乗った。その時彼が驚いたのは電車に乗っている人々がとても忍耐強いことだった．．．」

という日本文に対して、次のように、

What surprised him was how patient the Japanese passengers were.

という下線部の英文を書かせる大学入試問題があった⁽¹⁾。さまざまな英文の可能性があり、ネイティブスピーカーを含めて議論となったのだが、あるものは、特に passengers から定冠詞が取れた形の、how patient Japanese passengers are という形は、general statement であるから、現在形でもよいと主張し、また、あるものはそういう場合でも全体の文脈から過去あるいは過去完了とすべきだと主張し、なかなか結論は出なかった。

結果的には柔軟な立場を取ってどちらかを切り捨てるようなことはしなかったのであるが、この問題は英作文指導においてもしばしば教師を悩ます問題であるので、どのようなところが問題点になっているかを整理し、英語学習者の困難点を明らかにしたい。

Ⅰ) 時制の流れ(Tense Continuity)が崩れるとき

過去時制の流れに現在時制が入り込むのに、二つのケースがある。ひとつは書き手の視点が書いている時点に舞い戻ってしまっているものである。これはしかし、誤りでない場合も多い。ズインサー(Zinsser)が「旅行記などを書く場合、過去時制による過去の出来事の描写と現在時制による旅行案内の記述とを混ぜ合わせることはスタイル上好ましくない」⁽²⁾と指摘しているように、現在と過去の視点の混同というスタイル上の言わば、好みの問題である。また、ラボフ(Labov)は過去の叙実に出現する現在時制の文を「自由節」(free clauses)と呼び、地の文の過去時制とは無関係に過去の描写文に存在できる事を次の例で示している。

a. I know a boy named Harry.

b. Another boy threw a bottle at him right in the head.

c. and he had to get seven stitches.

この a. の文が彼の言う自由節であり、その時制は現在形で、過去の描写とは時制のうえで独立しており、過去の文脈に入り込める、と彼は言うのである⁽³⁾。彼が言う自由節とは現時点で真である命題をもつ文であると解釈すべきではないかと思われる。

この自由節と考えてもよいと思われる文は日本人英語学習者の書く英文にもよく現れる。たとえば、次の例は大学一年生英文科学生の書いたものの一部であるが、(4)(5)の動詞のある文がラボフのいう自由節に相当すると考えられないだろうか。

I enjoyed(1) the night view of Hokkaido twice. I was(2) very much excited. The view is(3) beautiful. Even now I can see(4) it when I close(5) my eyes. In any place in Hokkaido, seafoods were(6) delicious and the sight was(7) good, and..⁽⁴⁾

これは視点の統一がうまくいかなかったために時制の維持がコントロールできなかった大学生の英作文の例であるが、(4)、(5)の動詞が含まれている文は自由節の定義に当てはまることがわかる。

しかし、(3)の文、The view is beautiful. はどうだろうか。書き手はここから既に過去描写が現在の視点に移行し始めているのではないか。つまり、現在の視点から見た北海道の一般的な感想ということで、書いている時点の時制である現在を使い始め、視点の統一が崩れ始めたところではないだろうか。

この文の前に I thought 又は I think などを入れてみれば、視点の動きが確かめられよう。この場合は、I think の視点を取りながら書いたのであろうと考えられる。しかし、the view は文脈的には前の文の、I enjoyed the night view.... と時制と内容が密接につながっており、tense continuity の観点から、本来、(I thought that) the view was beautiful. のように、過去形にすべきところであろう。

こうした自由節とは言えない過去文脈上の現在形の例は特に日記や旅行文などまだ経験が新鮮な印象として残っていたり、思い出の中である種の印象、感想が現在形として保存されている場合に起こりやすく、それについては筆者はすでに論及したことがある⁽⁵⁾。

このような、ある過去文脈における自由節の出現という問題だけでなく、いわゆる時制の一致についてのあやふやな理解に基づいた現在動詞の出現もしばしば見られる。

この時制の一致という規則は、従属節の命題が主節によって規定された過去時制の枠組みに支配されているうちは、主節の過去動詞に対して過去動詞が対応するという整合性を維持できるが、従属節の命題が主節の動作、発言の過去性を超え、書き手の現時点におい

ても真である場合には、その整合性が失われる現象が起こる。たとえばロイター電の記事の中で、

The survey found that the Japanese admire America's freedom of expression, leisure time and world leadership....(略)....The poll showed 51 percent of the United States will be the world's strongest economic power 10 years from now, compared to only 14 percent of Japanese who feel that way. ⁽⁶⁾

などのように時制の一致が守られていない例は新聞記事などによく見られることである。これはアンケートの内容に基づき現時点での事実を述べる場合であるという理由からであろう。しかしまた、同じ記事の中で、

Fifteen percent of Americans said they admired the leisure time available to the Japanese and 27 percent of Japanese said they admired the industriousness of the Japanese. The poll found that 89 percent of Japanese admired the freedom of expression available to Americans, while 82 percent of Americans admired Japan's scientific and technical accomplishments. ⁽⁷⁾

のように、時制の一致を守っている文が同時に現れており、書き手の視点がアンケート調査に答えた時点における視点とこの記事を書いている時点におけるアンケートの答えの真偽との間で揺れ動いていることも見て取れる。

II) 英語学習者の困難点

上記の例のように、原話者でさえもその視点の揺れがあるくらいであるから、外国語として英語を学習しているものには当然時制の維持については困難点が予想される。これは日本人だけの問題ではないようだ。例えばリドル(Riddle)は、ヴェトナム人学生の書いた次のような例を挙げている。

While I was in the gym, I saw someone looks very much like somebody I know from my hometown. I was afraided (ママ) to come and ask her if she is from my hometown or not.

Anyway, I guessed she felt the same way, because not too long she came and asked about myself. Then I found that she is from my hometown. I could not be sure because she changed a little. However, we talked for a while, then she had

to leave.⁽⁸⁾

リドルはこれらの誤りから、過去においても、現在においても存在すると考えられている状態は、誤って現在形で表現されている、と言う分析結果を下しており、この問題が英語学習上の途上に現れるエラーであるとしている⁽⁹⁾。

先に挙げた北海道旅行の話の中の The view is beautiful. の時制にもこれと同種の問題が見られ、日本人学習者もその学習途上で、意識的に時制の統一を考えるように努めないと、このようなエラーからなかなか自由になれないことは予想できる。

III) 規則の一般化のし過ぎ

日本の英語教育の影響を考えると、学校文法の時制の一致の例外として取り上げられる「普遍的真理、習慣、は時制の一致に従わない」というルールが、一般化され過ぎて覚え込まれている為に起こることもあるようである。

つまり、書いている現時点で真であるならば、過去文脈でも現在が許されるというルールが無制限に用いられるために起こる誤りである。それが、たまたま上のような文の場合のように容認されることもあるがゆえに、学習者の混乱の原因になっているのではないかと考えられるのである。

これに関しては、一文レベルにおいての取り扱いにも責任がありそうである。He said the earth is round. なのか、それとも He said the earth was round. なのかという問題については、学習者に混乱を与えるものでもあるので、教える側でももう少し理解を深めておく必要があろう。整理すると次のようになる。

「一般的真理」を表す従属節の時制は主節の動詞が過去である場合どのようなようになるかという問題であるが、これを単純化すると、(1) 時制の一致の規則の例外を認めるべきである、(2) なるべく認めるべきでない、(3) 一応認めるが、それはどのような条件においてか、と言う三つの立場に分けることができる。

◆(1)例外を認めるべきだとする立場

これは、これまでの日本の学校文法の取った、公式的ではあるが、ある意味では便利な解釈である。ところが、この立場の大きな問題点は普遍的真理とはなにかという定義付けがなされにくいところにある。極端なところでは、クリスタルのように、「時に縛られていないと話し手が考える事柄はすべて一般的真理だ (general truth statements are all statements of fact seen as timeless by the speaker)」と主張するものもある⁽¹⁰⁾。つまりは、書き手、話し手にとっての主観によってあらゆるものが普遍的な真理になってしまうということだ。

コムリー(Comrie)は、John said that he is ill.のような文は発話あるいは書いている時点での事実を伝えているのであるが、だからといって John said that he was ill. がそうでないというわけではなく、単に現時点での真偽に言及していないだけであるとも言っている。

In the past tense version, no commitment is made as to whether John's (actual or alleged) illness is a state continuing up to the present, and in the present version, it is necessarily the case that I am reporting a (real or imaginary) illness which I believe still has relevance.⁽¹¹⁾

つまりどちらも正しいわけであり、言い方によっては、もはや時制の一致の規則は個人に任されてもよいようにさえ思える。

ネイティヴスピーカーによる判断でさえも視点の持ち方の相違によって揺れがあらわれてしまうことは英語学習者に混乱を与えずにはおかない。冒頭に掲げた入試問題の例文とその説明でも述べたように、学習者の時制にたいする自信のなさにもこれは影響を与えているようだ。

◆(2)例外を好ましくないとする立場

これに反し、クロウエル(Crowell)の考え方は「時制の一致は英語では大変しっかりと組み込まれているものであるから、一般的規則としては主節の動詞が過去であれば従属節も過去にするべきである。時々見られる真理、習慣、不変的事実を表す例外文でさえもこの規則に従って何ら間違いではないし、むしろそうすることをお勧めする (Tense sequence is so firmly entrenched in English that a general rule can be set up: if the principal verb is in the past, the verb in the dependence clause is also in the past. ...略... The sequential form is just as correct and is more usual, and I recommend that all speakers use it.)」と主張するのである⁽¹²⁾。

彼の立場は規則の一元化を目指しており、学校文法においては最も無難な方向を示唆している。またボーリンジャー(Bolinger)の言う older speaker の言語観を代表するものであろう⁽¹³⁾。しかし、言語事実を無視して規範的であろうとするところは、時代の流れに沿った言語変化になかなか対処できない。

◆(3)例外条件を明らかにしようとする立場

第三の立場としては、時制の一致の規則に従う場合とそうでない場合とでは文の性質にどのような違いがあるかを明らかにしようとするものである。とくに主節の動詞によって

その分類を試みる研究があり、コスタ(Costa)やスミス(Smith)のものがある。

例えばスミスは、

*Mary feared that Bill is sick.

*The family thought that the money is safe.

という文では、たとえ、従属節の命題が発話時点で真であるとしてもおかしいとしており、その理由を主節の *feared*, *thought* という動詞がそれを許さないとしている。なぜ許さないのかという点については、これらが時制の一致に必ずしも従わない *realize* などの叙実動詞 (*factive verbs*) や、*tell*, *say*, *hear* などの伝達の動詞 (*verbs of saying*) とは違う種類の動詞であるためだとしている⁽¹⁴⁾。恐らく、*feared* や *thought* の動詞は明らかに話者の視点を発話時点に固定し過去の視点をとらせる性質が多いせいであろう。

コスタの分類によると、従属節で現在、過去いずれをも取る主節の動詞として、

forgot / *mentioned* / *regretted* / *realized* / *discovered* / *showed* / *noticed* /
was(were) *amazed* / *was(were)* *concerned* / *said* / *reported*

などが挙げられ、従属節の動詞が義務的に時制の一致にしたがわなければならないものとして、

knew / *was(were)* *aware* / *thought* / *believed* / *imagined* / *figured* / *dreamed* /
wished / *hoped* / *asserted* / *alleged* / *insisted* / *quipped* / *snorted* / *whispered* /
it seemed / *was likely* / *was possible* / *was unfortunate* / *was a fact* / *was true*⁽¹⁵⁾

などが挙げられている。

冒頭の入試問題についての見解の相違は、この分類の前者、すなわちいずれの時制も取り得る動詞句の中に *was amazed* があるから、これと同類の *was surprised* の性質に起因するものと考えられよう。また、ロイターの新聞記事の幾つかの動詞、*said*, *showed* も、この分類で現在、過去いずれをも取る、とされていることからして、この記者は間違いを犯している訳ではないということになる。

しかしながら、従属節の過去時制が義務的であるとする仲間の、*was aware*, *believed* でも、Columbus *was quite well aware of the fact that the earth is round*. Columbus *believed*, just as we do, that the earth *is round*. の例のように、ボーリンジャーは容認しているところを見ると⁽¹⁶⁾、機械的に主節の動詞の種類だけで決めるという訳

にはいかない。他の要因、ここでは、the fact that～や、just as we do, が現在時制に視点を振らせる働きをしているのかもしれない。つまり、語法上の制約だけでなく文脈上の視点の持ち方の加減で、用法に個人差が認められるのである。

IV) 結論

以上の考察からいえることは、文（特に主節の過去動詞）や過去の描写文の地の文を支配する時制が与える文脈が、命題や話題の過去性を話者に強く意識させる場合には、従属節あるいは generic な文も過去を取りやすいのだが、そうでない場合は、従属節の命題の一般性、現時点の事実性に引きずられる場合がある、ということである。

すなわち、視点の持ち方、スタイル上の個人差によって、真理文に限らず、新聞、話し言葉、そして日記の類いなどで、現時点での事実性が強い時には時制の一致に従わない例や、現時点で真である事を強調したい場合も時制の一致に従わないことがあるので、必ずしも間違いではない場合もある、という折衷的な立場を、例を示しながら柔軟に取っていくべきであろう。もちろん、それは必ず一文においての判断ではなく、文脈においての判断でなければならない、ということも忘れられてはならない。

理解の上でこれを踏まえながらも、英語教育の現場では、規範的であるが、(2)の時制の一致を守る立場でいくのが無難である。特に、時間的に余裕がある書き言葉の使用の上では、スタイル的に、過去の視点を守る (tense continuity) ことを念頭に置き、文脈が過去であるのならばその時制をできる限り守るよう指導した方が混乱を招かないであろうと予測できる。また、リドルは教師が意識的に過去形の用法を教えていくのが学習者に時制に対する理解度を深める方法であると示唆しており、実際の使用を提示できることが効果的であろう。例えば彼女はロールプレイの例として次の会話を挙げている。

A: Did you see that house we just passed?

B: No. What about it?

A: It had a green and orange roof. ⁽¹⁷⁾

また、次のように教師が時制に注意を喚起するための例を会話の中に織り込む事も提唱している。

The instructor can also start a conversation with students about their studies, native customs, or past experiences and at various points animatedly exclaim, for example "I didn't know you and Keiko were in the same chemistry lab!" or "I didn't realize that the Vietnamese ate curries!" ⁽¹⁸⁾

このような文体統一的な視点を持っていても、どうしても現れてしまう過去文脈上での現在時制はラボフのいう自由節である可能性がある。そしてその自由節はクリスタルの言っている主観的判断に基づいているということもできるので、ケースに応じて対処するほかはない。其の際に参考になるのはコスタ等による、主節の動詞によって従属節の動詞が現在形を取るか取らないかが決められるという指標であるが、これも絶対的なものではなく時代と共に個人の使用法が変化して行くものと予測され得る。

注

- (1)1991年度立教大学入学試験より
- (2)Zinsser, William(1980), *On Writing Well: An Informal Guide to Writing Non-fiction*, 2nd edition, New York: Harper & Low Publishers, pp. 54-56
- (3)Labov, William(1972), "The Transformation of Experience in Narrative Syntax," *Language in the Inner City*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, p.360
- (4)立教大学英文科2年生の英作文より
- (5)拙稿(1991)「なぜ夏休み後も学生は I have a good time this summer.と書くのか」、現代英語教育、1991年1月号、研究社、pp.50-51
- (6)デイリー・ヨミウリの記事より、"Poll: Japanese, Americans Know Little About Each Other", 1992年2月3日
- (7)同
- (8)Riddle, Elizabeth(1986), "The Meaning and Discourse Function of the Past Tense in English," *TESOL Quarterly*, vol.20, No.2, pp.267-286
- (9)同、p.279
- (10)Crystal, David(1966), "Specification and English tenses," *Journal of Linguistics*, vol.2, No.1, p.22
- (11)Comrie, Bernard(1985), *Tense*, Cambridge, England: Cambridge University Press, p.115
- (12)Crowell, Thomas(1964), *Index to Modern English*, New York: McGrawhill, p.342
- (13)八幡成人(1991),「ポーリンジャー博士の語法診断「時制の一致」」, 現代英語教育、1991年1月号、研究社、pp.42-43
- (14)Smith, Carlot(1978), "The Syntax and Interpretation of Temporal Expressions in English," *Linguistics and Philosophy*, vol.2., p.66

- (15) Costa, R.(1972), "Sequence of Tenses in that-clauses," *Papers from the 8th Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, p.46.
- (16) 八幡、前出、「ボーリンジャー博士の語法診断「時制の一致」」、pp.42-43
- (17) Riddle, 前出, p.283
- (18) Riddle, 前出, p.284

(立教大学助教授)